令和６年度　幼児教育研修（年齢別担任研修２歳児・第２回）
「子どもの発達と保育者の関わりについて」
～２歳児の世界に寄り添い楽しむ～
日時：令和６年９月１０日（火）１５：００～１７：００
会場：足立区生涯学習センター
講師：相模女子大学　教授　金元 あゆみ 氏

動画から見えてくる**子どもの世界**を見取り、子どもの姿から聴こえてくる声に耳を傾けました。

一人遊びの世界に浸る

事例 １　水たまりとボール

サッカーボールを水たまりに置き、小さな石をボールの溝に乗せて、そっと転がした。石が水たまりに落ちると、水の中から石を探しては、同じ遊びを繰り返す。次に小枝を見付けると、同じように転がし、枝が落ちると水たまりの中から手探りで探し出し、ボールに乗せていた。

石が落ちないように指先でそっとボールを転がしていた。

石はすぐに落ちるが、真剣な表情で石の動きを観察していた。

ボールも小枝も水で濡れているためボールにくっついているように見えた様子。

水の中に落ちた石や枝を「この辺かな」と見当をつけて探している。同じ石や枝を探すことにこだわりを見せている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事例 ２　水遊び

タライの水をひしゃくで汲み、ペットボトルに入れる。ペットボトルが一杯になると水をひしゃくに戻し、近くにあった広口の容器に入れた。広口の容器も一杯になると水をタライに戻し、今度はペットボトルを沈めて水を溜めようとする。

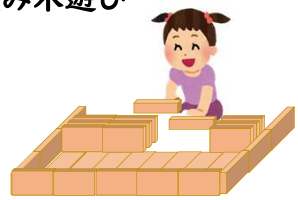
道具を使っている。注ぎやすさにも気付いた。

いっぱい、ちょっと大きい、小さいなどの概念を取得している。

ペットボトルを直接水に沈めたほうが、簡単に水が溜まることに気付いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事例 ３　積み木遊び



積み木を横一列に平らに並べ、そこに積み木を立てて囲いを作った。さらに囲いの中に積み木を敷き詰める。積み木がずれると、整えたり囲いを広げたりして、きれいに並べようとしていた。積み木が汚れていることに気付くと取り替えていた。

自分なりのルールがあり遊び込んでいる。目的をもって遊んでいる。

きれいに並べたい、隙間をうめたいと考えながら遊んでいる。

きれいな積み木を並べたいと思っている。

自分の力で実現していた。やりたい気持ちやできたことの喜びが感じられる。

「個」の世界への没頭は、閉じられた世界ではなく、開かれている。
じっくりと自分のやりたいことや試したいことができる環境が整っていると
子どもの中に「何でだろう」「どうしてだろう」などの問いが生まれてくる。
問いが生まれると試したくなり、それは新たな気付きへとつながる。

「ともに」が嬉しい ～他者にひらかれていく私、つながっていく私たち～

事例 4　3人の物語

泡ソープをコップに入れると水を足し、それをボールに移しては、またコップに泡を入れる。それぞれが隣にいる友達の遊びに興味を示し、真似をしながら平行遊びを楽しんでいる。

テラスで牛乳を飲み終わると自然と誘い合い、3人で手をつなぐ。行きたい方向を指さし、園庭を走り回り、探索遊びを楽しむ。

砂場に行くと、雨どいをつなげ、そこに皿、コップ、ふるいなどを転がしたり並べたりする。次々と玩具をつないでいたが、最後はスコップを置いて終了となる。

泡ソープの取り合いや、手のつなぎ方でトラブルになった。
保育者が仲立ちをしたが・・・。

子ども同士のトラブルは、友達の使っているものや行為に対して共感している証である。

・「ともに」が嬉しい。
指をさす行動は、「同じものを見て」「同じ方向へ行こう」という気持ちの表れである。

・同じ場・モノ・行為で互いの存在を認め合い、イメージを交わし合って遊んでいる。

遊び・人をつなぐ「場」「関わり」

事例 5　バス（電車）ごっこ

押入れの中をバスに見立て、S保育士を誘い乗車する。
運転手役のA児が途中でいなくなると、「電話をかけてみよう」とB児が提案し、手作りのスマホを取りに行った。電話をかけるが来ないので皆で声を出してA児を呼び始めた。押入れの中の子どもたちは、待っている間にお弁当を買いに行ったり、かばんやスマホを持って電車に乗ろうとしたりするなど、バスごっこが広がっていった。

空間が遊びをつないでいる

保育者と子どもの対話によってつくられた環境であり、子どもたちが居心地の良さを他者にプレゼンしている。

環境構成を考える

・遊びに集中できる環境は、閉じた空間か、他の遊びが見える空間にするのかは、子どもの姿から考えていく。
・見立てができる玩具があった。

「子どもの姿に聴く」

遊びに参加するときも、見守るときも、「ともに」の姿勢を大切にする。
驚き、感動、不思議さなど、子どもの生きている世界を面白がる。

研修生の報告書より

「個」の世界に没頭し遊び込むことは、閉じられたものではなく、外の世界（他者）にも開かれていることを学んだ。それぞれが 「それ、いいね」と相手の世界を肯定・共感している。そこから「一緒にいること」に意味をもち、それぞれのイメージを出し合って遊ぶことにつながっていくと知った。

子どもがバスに乗ってお弁当を食べたり、一人一人に用意された玩具のスマホを使って電話をしたりする姿を見て、現実を交えた世界観が子どもたちによって出来上がっていると感じた。保育者は子どもの姿や言葉を聞いて、より楽しめる環境を作りだしており、子どもと保育者が主体となって、ともに保育を作っていると思った。